

東京農業大学におけるJABEE導入による教育改善

Improvement of Engineering Education Program by JABEE, Tokyo University of Agriculture

駒村正治

Masaharu KOMAMURA

1. はじめに

近年の大学を巡る環境は、18歳人口の減少、全入時代を迎え、大学間競争を高め、質的な転換に迫られており、ますます厳しさを増している。社会からの大学に対する期待とそれに対する評価する目は厳しさを増し、とくに大学の使命として求められているのが建学の精神をいかに受け継ぎ、次の世代に発展させるかである。

そのため教育改善の具体的方針として生産環境工学科では JABEE 導入に乗り出した。2000年の試行審査にいち早く参加し、2003年に本審査を受け、農業土木学コースとして ABEE 認定された。その後 2005年に中間審査、2008年に継続審査を受け今日に至っている。

本学科の JABEE では、その学習・教育目標に際して、「実学主義」を原点とし、社会の現実を直視した実証的研究に基礎を置き、伝統的な教育理念である「人物を畑に還す」をモットーに、卒業後は地域のリーダとなるような実践的教育を目指している。

その一方において、JABEE システムそのものが大学の教育改善への道であること考え、継続的に進んできた。本報告は、本学が JABEE を基本に取組んでいる教育改善の具体的な内容を紹介する。教育改善項目は多岐にわたっているため、ここでは JABEE 審査でとくに問題となる「大学の FD 活動」および「教員の教育貢献」に焦点を当てた。

2. 教育改善への組織的な取組「大学の FD 活動」

(1) FD 活動の概要 本学では教育の実質化と教員の教育指導方法の改善を促進することを全学的に取組むため全学 FD 委員会を 2001年に設け、教育の改善に取り組んでいる。

2002年には学生による授業評価の評価項目の見直し・Web シラバスの導入・小テスト集計システムの導入・学生の学習意欲、教員の教育に対する意識調査・社会人の教育に対する意識調査を実施した。

2003年には GPA 導入の検討・学生による授業評価の Web 化の検討・新任教員研修を行った。しかし FD 活動については、教員間の温度差があるのが実状であり、この改善が望まれる。そのために FD メルマガを通じて共通理解をはかり、一方で教員の負担を軽減する手立てを提案することを目標とした。

(2) シラバスの作成と改善 2003年からは各授業担当者がシラバスを Web で入力しその内容を公開している。さらにこの Web シラバスは授業内容のキーワードや授業担当者名で検索する機能（詳細シラバス）を保持しており、学生の進路・興味に対応する授業科目を探しやすくしている。なおシラバスの記載項目の主な内容は、①授業科目情報、②学習・教育目標、③毎回の授業ごとのテーマ、④授業内容、⑤授業のねらいまたは準備しておく事項、⑥評価の方法、⑦その他の注意事項などである。

(3) 厳格な成績評価と「秀」評価および GPA の導入 厳格な成績評価を行う仕組みを形成する以前に、厳密な成績評価基準の作成が必要である。例えば、評価項目は、定期試

験、レポート、小テスト、発表内容、作品製作など科目によって多様であり、個々の科目および教員の基準と判断によっている。ここで問題となるのは出席点の加算である。授業には全て出席することが建前となっている。授業への欠席は社会人の有給休暇と異なる性格である、欠席届さえ提出すれば、休める権利があるかのように思っている学生がいる。現状では2/3以上の出席で定期試験を受けられるように規定されている。この件に関して各学科においてさらに検討し、実行ことが、将来の改善・改革につながると考える。2006年からGPAの導入に際して「優」評価の上の「秀」を導入した。この場合の前提となることが厳格で公平な成績評価に実施である。このことが不十分であるとGPA評価が機能しなくなる。いわゆる楽勝（評価の甘い）科目や学生から疑問の生じる評価の存在では、その上に立つGPAが無意味になることを申し添える。

今後は、進級制度のシステムの改善のために、GPAの導入を提案したい。すなわち取得単位数のみでなく成績内容の質も加味することである。例えばオール「可」でも卒業できるのか、GPAの低い学生への進級制限や履修制限および就職活動制限などであり、その裏返しとしての履修指導の徹底化である。

3. 教員の教育貢献：教員の教育研究活動についての評価方法とその改善

本学として学生による授業評価やオフィスアワーを実施する方針が打ち出され、本学科としても取り組んでいる。授業評価は全教員においてかなり高い割合で実施されているが、授業改善へ有効にフィードバックするためのチェックシステムが必要である。教員の研究活動については、発表論文などの数により研究業績として評価され、昇格人事において考慮されている。一方、教員の教育研究活動の評価については、全学に教育評価委員会を設置し取り組んでいる。その活動の概況は2002年に自己教育評価項目を定め試行し、2003年から運用され、調査項目の見直しをしながら今日に至っている。評価項目は授業など諸活動における、①研究、②教育、③課外活動、④学内運営、⑤学外での活動の5つの柱を設け、合計86項目の多岐にわたっている。この実施結果を、職階ごとに集計し、この平均値をもとに2003年から昇格と他機関兼務の許可の参考資料として活用している。教育活動については担当時間、研究活動については研究業績（論文）数が、昇格人事の際に適正に評価されている。教育活動と研究活動の比重は教員によって異なっており、今後は多様な評価基準を設けることも視野に入れて検討されるべきである。これは学科で解決できる問題ではない。しかし、まず各学科において、教育活動の評価方法、研究活動についてはその質まで問えるような評価方法の確立が期待される。

4. おわりに

FD活動の実施等に関しては学科教員会議を通じて全教員に周知徹底されており、各教員の意識向上に貢献している。今後、実施結果を積み重ねた上で問題点があれば改善策を検討する。また、学生の学習意欲に関する調査については更に充実し、定点観測的に実施することが望まれる。なお、本学科はJABEE認定のための自己点検システムを設置し、実行している。すなわち教育点検委員会および技術者教育検討委員会を組織し、相互に連携しながら検討を行い、教育効果測定システムの有効性を検証している。特に、外部の社会人としての卒業生からの忌憚のない意見・注文を聞き入れるシステムが重要なことと考える。さらに、学部再編後10年を経過した2010年からカリキュラムが改定され、新しい教育システムによる授業が開始され、不断の教育改善に取り組んでいる。